俳諧一葉集

二

へ
利
1258
2

俳諧一葉集附合之部一

古学庵佛兮 編
幻窓湖中
坎窩久藏 校

延宝五丁巳春

此梅に牛も初音と鳴つべし 桃青
ましてや蛙人間の作 信章
春雨の柳は全体連歌にて 、
研味噌ましつもの野守の下蘭 青
摂殊を若菜茶にすゝむるも 、
むかしもよう紀の男ゆつく 章

へ5

勝のひらけて見ゆる出の月　章
爪たてゝゆくはし鬼の山　青
ウ
五すぢとまのとゝのさる京の花　章
ひとつはなまり住よしの松　青
淡路しま社形をあのそこに見て　章
友よぶとりのうらしひあかる　青
さゞ波のまろさ白絹の襟ごゝ気　章
森の下風木の葉六ちり　青
吉葛原ふかれて這て通ふらん　章
虫鳴やまきにむごしあひのぬ　青
恋の秋こにたらくのうらぞよ　章
吉祥天女もうれなとの月　青

ほつとへ私機路のうる山かゝり　章
松のほそしみひとく耳たぶ　青
大黒は袋を荷子からみひさく　章
かすみ手もろき天竺のきぬ　い
二
ゝ錦の雲貴女一文ぬ櫛をとく　青
風に進退を割る株庵す　章
膳の跡をよし京通ひきれ早て　青
うみあらのお鞍うしめしの中　章
坂千はゝハ石的なとくちるひてし　青
末の松山葉漬み条　章
千鳥の浦立むかてる旅情の隅　青
雲路さよひて入しうまるぬ　章

たかはまてしらすゑハ六祇の　青
高越山そのく入し夜風　章
すやかしこぬの袋に濁る声す　青
千里をうけてるきねかなし　章
秋の月入ぬ方にの札の辻　青
寿んまの針町しみまたまるか　章
二
煩悩の末に説中陰まいあ　青
人足あ続ハ山燒も這入　章
谷の戸をたゝむ起しく觸流し　青
詩る々の小路をそれの声　章
花をふんですゑハ千の出門の府　青
上野下屋の冬れまたこの毛　章

隅田安の新ゑ打果て　青
證文毛き作出くるを見れ　章
るり紺うハやましれし何にむさし　青
ましとさめ際見く人数の月　章
大学生無学を親す取とて　青
五代の掟ハのされ張ハ民　章
古も木ま三百とりに肥つる石　青
三
此山ひらけ隠居料すと　、
不二の嶽ゆるしく雲を剃こほし　章
人穴ふつの出るや桶の底　青
蝙蝠やゝ角の錢の番ふ　章
山椒つみや故椒あつしむ　青

小枕やころしぶしハ引よふしハ　章
甚不よりし女のよひ声　青
うかひ路の二階ハ升き切れと　章
かしこまる猫屋当役み松　青
ともふつきし長柄の橋もつくりさし　章
既因法師が右京のとれ　青
思つけさく色は是ぞや帰つても　章
てさもちのこゝろ眼茶の肉　青
飢饉とし動きくてぬる秋の営　章
二ウ
多くハ備宝萩の上風　青
一葉つ柳の蝦やそけぬ小暑　章
ら経もまちすてけりしけ志し　青

粉食の身ハしもやかいましめ小大　章
妙法蓮華玉もの浄瑠璃　青
抄もられさらつさんごさちら山端に　章
松吹風や風呂屋の子ども　青
果らすかみの二布の下紐紫　章
越ろし秋を蒔麦ふくろ　青
月すくく堂辰の文系中程で　章
河内の姿へうよふ飛石　青
四五年やまこ川屋の里も繁く　章
浪に芦垣結つきり　青
桐そ花入江の月中陽り　章
やつこつ一流松ぞ誠紀

名
いてさしハ魔法にまちむしと見へて尺よ　青
七りし以くく入ねのあるゝ　章
茶湯三斗の古寺汲かけさ　青
荻さきてしく秋しし生のこち寂　章
階狄れゆ目より八月より　青
酒えけ釜千毛舎の空　章
既手祢みしつま汲かくさぬひつ　青
白蛇屋ハ陣床よ与秋て　章
つくしと向手たてる陵山　青
ミけ入設所ハ小路の翁笠　章
思ふ秋ハ狐のあるくまよつくむ　青
ゆふまで杓し秋げゆきの声　章

后人ともの月まちわれしく　青
古文書寛今のつまる秋　章
十三
酒の香ただよけ起で白雲飛　青
て稲たふしや人のまつまや　章
秋のよき紀秋の大木大間座　青
紀をひかえて気やらさ来る　章
拜すて日本の知ろ也やうけぬめん　青
ゆつ紀の玉をとつくぬのわらり　章
花すまうこ禁の里ハ十国子　青
夕坂らゆきハ峰のさくらひ　章

同年春

梅の風俳諧国にさかんなり　信章
こちとうづれも此時の春　桃青
さやまんす霞のきぬの袖をえて　ゝ
けんやくしらぬ心のとけさ　章
売てこれに中津石方ぢやくしやす　ゝ
うさ晴の雪はそれけくさひき　青
海尽しさ峯の雲すか月すこし　ゝ
ウ
趣向しらくる松の翁舞　章
いつの千歳翁こころえまるの秋の風　青
寝られぬ太用し時分の羽衣　章
うつ蝉も十四の山に琴ひいて　青
青嵐ふくひとよぎりふく　章

松杉の木ずゑの庵家はなれ　青
業撲桶きよし村雨の空　章
夕陽を生ひ立頃る寺の雲　青
老子のすむさ山の端かくれ　章
寓言の昔しの蔦紫ぞむ挑て　青
桐壺をきる木を志ぐれち秋茸　章
瑠の客夕のうさみりすみやうふ　青
打ち合六林こけりもる月　章
古里の子らの夕のあはもむ夜で　ゝ
志賀山のまふいこふく風　ゝ
二
さゞなみや二葉の袖をさへて　章
何一つで洗ふあし原の末　青

ゆふ暮て池のうきなる石ひとつ　幸
玉子のおやうちらくく洗　青
侍が宿のよふすんかまそ吹　幸
上瑠璃よそ文ハ枚折　青
付とくけるもひよ最の底中でも　幸
新教分ハのてのれなしや　青
壺中よ大客ゆれハ所人あり　幸
柳ハみとりつけハ萌緒　青
古帳手枝点をを引紛雲　幸
火鉢をとなくして客のきて　青
うるのゆみうち蛙とても浪の月　幸
浮葉子のいけとり秋をむかし　い

しるて噺きけハそみさハ萩の花　青
地獄のゆふくさしも間にある　幸
氷室年ハうつき見えて上り　青
延年舞は薪能の長もし　幸
鸚鵡よりさえやまもきの音なん　青
亀ハたちまち下女に物ハ飛　幸
恋わかの情頼ハの御使手　青
白むくそくて粟五十石　幸
田原る給よあつひとたひ来く　青
ぬるい宿も蕎麦の秋風　幸
床ハ海翁解人の室の月　青
虎の毛ころもわかれゆく客　い

くるうぬの築地の崩ちとらんで　幸
草まくら行くる秦の法くれ　青
能のかみ徐福が似せのうさ策　幸
まり蓋ひるく乾坤のか　青
瀬戸の出金輪際をおりぬとて　幸
弁才天の鯰さしくれ　青
三
三日月の淀にうぬ海このところ　幸
その秋の不二も足柄の山　青
かんに屑ほいまれくわかりきて　幸
咒よし成仏とらむ人の法　青
錢み法府をやまら郷の酒　幸
龍田の紅葉豆腐四五丁　青

むかし雨宿りくらひの二また　幸
人家の主風さらくなり　青
大火事を避けのこふきむ恵　幸
やうしてゆる五手の松山　、
三了
日本橋ちんとすれて端なし　青
方々へ尺をしりて作肥の源介　幸
かいつのみちる便ら拂ふ雪の雪　青
雑子八こくつく愛とふりなり　幸
伝手春芦のものいふよの中に　青
何とてし松そするみそ尺ゆらん　幸
うやまふもの寒くまでれぬ晦の雪　青
勝手の出を焼かへし去ろて　幸

物語作者白髪となられけり　青
平家の秋に癡（ニキビ）阿梭ゆく　亭
かみそりも内侍あまた見る月　青
のきまくらけしとるやこの芳　亭
衣匠も咲に弥勒の花待て　青
かくの法縣を高砂の素　ゝ
（名）岩橋やあんとうけろ一つ手も　亭
天にうつめく虹のつてそう　青
その田偏多河ハ手本（テ）を接ろへて　亭
日備の札に悪魔払さむる　青
猫さ豹欺安全にあまくしと　亭
苔也ハこのみよくさゐる半の直　青

人として思ひましんや親の五悪　亭
移りよりくわる竹　若　青
いまの松ひのみり艾葉の百すくれ　亭
寺松のまとを少縫にて尺す　青
飲より庭訓今川亭子義　亭
されとみるみて二条帰たまつ　青
府の月端をとすみなひちまゐり　亭
後陣ハいやさし横町の家　青
（き）上さく新暮義雨しかふれ切りくも　亭
大根の情もちうく捨る月　青
錦株式本草を讀誦する　亭
南無いは算沙本返の附　青

空に蛸ハ雲に浮ミてひかゆく　章
とう矢二筋まふてしの先　青
軍ハ花追手搦手にらみ合　章
春なれ何百きさしの毛　青

同季

あら何ともなやきのふハ過て河豚汁　桃青
寒さしさつて足の先まて　信章
居合ぬき霰の玉やみたすらん　信徳
拙者名字ハ風の篠原　青
相応の御用もあらハ池の邊り　章
海老さこまじりにおこしハ餅　徳

碧海の浮ん済るて月まみて　青
更る夜はし小便の露　章
ウ
か耳やよそにはやしき萩の聲　徳
難波の芦ハ伊勢のよもいち　青
屁しきるは衾しもやふくか　章
かくそ小判や袖に隠すらし　徳
物陰よ認めしめ、香あるさ　青
干鯨四五敷られし寺の客　章
寺の坊く物まひ神くら屍花とそ　徳
みしらふらち雄て肩つく　青
縫打のさくらうかなすをまつの寸　章
寿命積つて猿猿の功　徳

嵯つきの坊主も秋や出かけん
も一休みしてをとなやの月
花の明る朱鞘を残す夕百合
山川やきつけみ岸の山まで
二
よし野川も長つゝしみ菜碗
残り紅よう野雪々降れ
風まく桐枝百本割られん
雪卯桜の紋のしつらえ
双六の菩薩もこゝ作法
店先の跡をすくひもしつく
月の本は島内金谷の三瀬川
かゝる尾張も湖八ゆうく

書 章 法 書 章 法 書 章 法

小箱園子大蛇のふしみ鯱駁
鉄の飯梳湯となりし中
一二秋彼るきぬしく蓋こそ
月八たりしめ親仁友しかし
茶碗はかねてひきうしれ
胸算用のすゝきみさらる
三
猪度も半の秋秋突風子
香手子やしる渡の寄宿
何うたれて石硯鬼飛ぶ為
古の陸飛の草原ふけ行
堤うちの人すらひつ読んで
文芸う子をと先途なりなん

書 章 法 書 章 法 書 章 法

今ハもう新粉をしくらぬ　青
物ずきに添ふ手水の水くるゝや　享
ゆふ附ハ茶の二階を追こらみて　法
何ぞとも句ハ猫の月の宿　青
月影や屋の琥珀を墨ぶかん　享
暇乞ころもうて一すぢ昔　法
三
法の声で夜名に非常の前　青
名残の雨も一ぞうかゆく　享
上にハ越の志ら山うする霞　法
百姓石に桃ゆらふめり　青
咲きし棹そゑ帯に涼呼ず　享
守随極の所に撰集　法

掛乞も小町か姿といそよい　青
うき名なる朽木の枝ヶ寝そふれ　享
小袖ゆかりし風情て八重の月　法
ふける入るはうしをうすり露　青
法等や色みは老く山の秋　享
さる染人なまぬの葉に色　法
琥珀千に衣さるいゆとも幸うう　青
うち佗て雨夜の言ふ合羽なる　享
飛のまれ言かくしとや財ふ　法
森の風に秋て八なれ可　青
三ノ
二　枝保有つとぞしくこ之隠れ　享
三　筐の山を引のある　つて　法

萬代の古気習しと呼ぶなる　青
鶯も生れの里の羽衣　幸
田子の浦浪うちよせて顔竹雲　法
不二の尾さゝ陽了河戸の渡舟　青
おハ海入日を浪ふうしろ跡　幸
松が根まくら石の縁よる　法
清き世とや化女の衣手かへ　青
尾花の招くも伊の月　幸
乗るゝを嵐のひとしれずの秋　法
浅みどりる寒きりの露　青
衣裳姿の海うつすそ花の風　幸
身ひとつへる駈まて白露　法

名
詠の声一聲二百生く姥て　青
所富ハさいふめてハ悪久山　幸
雲分の松手引定千本くらし　法
幽霊と来て浪姿のふぬすみ　青
翠緑まの橋の上より落ちて　幸
新合せ数の事ゝ生れる空　法
祖父祖母ともおえや若くもとて　青
鼓をいふしやち雑書そへてく　幸
米俵にそ詰て肩まつけ　法
本賃の夕風私三郎　青
幸弁天も志けし体ふ分御　幸
かもやわをともかる川舟　法

もしやとも追手鳥なる波の月　青
すハ諸人も芦の穂の声　孚
物の戯っ振舞みすうて津の戸　法
木蓮子の尾山の端の雪　青
人形の瀬の一ハよりけ渉りし　孚
たちりけ干かゝる芝の汁き　法
けり箱菜腐とするなる七段まで　青
住よし語白游こしの海　孚
湊汐深かよひ子のかの色こしめて　法
神代以来ね入の車　執筆

延宝六戊午春

さゝれ数浮溺璃小家ハ夜の花　信章
うすみともにぞか人　秋　信徳
青ハ西吹ふ山より妻尺して　桃青
かくしうけの滝の気ハのむ侭と　孚
商からぬ嵐に浪の出舟　法
阿ゞよそ魚くゝ浮方友ぶち　青
且富はさひきなまそりなる　孚
松を海操り礼金の秋　法
ウ
すうけりの夜の中るに覚より　青
思ひのまゝ川に北見ころし遣　孚
木陰ゝ夏つゝ菜の下ゆる小　法
問侍としとたてくもかし　青

随田家進退もあきたのされて　幸
二人の若衆浪人小姓　浅
作すすちきれてもけ足　青
清さけやつけ銚子の母衣　幸
心なあのさての隣へ家を八　浅
浪士き入りて大釜の洞　青
岩洩れ地獄のあくさうに清なき　幸
強き抜解のあをを砕くな　浅
海の月清妻子の浮振翁　青
陸の内役あ家の秀　幸
二
肩を取袖ふさうする花共　浅
咲んなて八垂布捨あり　青

瑠の尻入得の汐す寺を付るく　幸
のり庵れしし鴨の鳴ぶれ　浅
山うけ精進落く松の香り　青
三十三年秋たてゝる虎　幸
蚊帳や後成仇の赤子うけそ　浅
宗筆清河小傍新著豆　青
いろは韻経之山もあのくるく　幸
紫を増猫うける降秋　浅
新ひらり花月清の寺根あ　青
咲の字み欄しの給一枚　幸
賀舁よくき母をしてて呼鉢や　浅
まよいすれ母縁さめけり　青

二

俗言を人しりのそしそのむかしは 幸
悪鬼と来て姿ハ千まし 池
正之りて悪れさらすのかくり 青
らしに花まちら経をきよく 幸
おハや東叡山の大師しき 池
花のさかりに町中をよふ 青
青梅の多ゆふしくや八 幸
遊景千むつ前陳ふらふ 池
まきふしてを吹らさんの性峰 青
毛童ヶ硝子南のみ之醒 幸
恋のたま雲れ隠してあまけ 池
浮寿卜使風の玉幸 青

三

心中で山林竹木指きるを 幸
末寺の宗匠苦挽和の月 池
十才の和尚のしハ年秋ふけて 青
孫壮ハ一つさハ清やまむ寄 幸
葉のいと理趣の店の風添し 池
そのけよのよる候篭のふみ 青
差の涸まて勧使し人あ時 幸
首うけの思ひ性てゆし 池
うき中ハ一六年をうれて弱しい 青
家しの書き寄汗ふうて 幸
志ふいあ大数寄の書おもてき 池
雑写俗正床入の山 青

若衆のさかり流行ては八重太郎　幸
かつらすゝりや右近なるらん　浪
夢の月橋の精ゆかしく飛て　青
すまし山も恵比成佛　幸
天性の眼の光り陽の珠　浪
揉穂の光り因果すふとち　青
恵以やさ食すひろの窓の身の　幸
志きうるとして十貫目もこ　浪
大八や志のひ車の思ふらん　青
日衣をめしてタの浜の沼　幸
山荘の柿羅子尾をつけ　浪
青葉の月白羽わきて渡く　青

宮内茶子本宅のうちやなまゑすらん　幸
よう○数ろしの谷淀か問　浪
山高く漁舟帰る丸雲し　青
淀宮の名もかり標石の跳　幸
白象くし花の雲夜の修法ある　浪
鳳頭巾は狗いとみ声　青
延坂を中宿ゑみす引連て　幸
山まさき山や三玉の丸郎命　浪
再手取留守やくまえつ　青
松風の音も出残をとく　幸
古梅の庵の菩提葉三六万　浪
楚国のかるくし横町の秋　青

邯鄲の里の新花月ゆゑ　章
よくしゃべへは余所を知る　徳
千句より十万億の鼻の先　青
糸からくりの左武菩薩　章
音楽の小弓三味線ありの山　徳
四竹さハく件の打く流　青
姉添て御伽比丘尼のゆくも　章
浮名そやかしの佛まんくまします　徳
ゆつりし黄金の鬠ことや千手　青
小嫁みしのよの草鞋はり　章
旅枕ゆくさきやきし娘らん　徳
鰯く仮のちきり焼つて　青

そのゆきうけたくし汁のうす情　章
料理の男牡のよしを打て　徳
実や花白木てさ焼弟子　青
居ちく帰りる羽箒りの所　執筆

同年春

物の名も蛸や古郷のいかのぼり　信徳
仰く雲井百余里の春　桃青
峰よ雲のゆの草鞋名和く　信章
ゑ人力の東風ふくるも　徳
態つのひもつくハ月のうすくすり　青
あき衣を作ふ秋のうの露　章

墨の羽萩の下葉のうつろひて　述
尾花の袖を鏡かざして　青
ウ
おもへばいのちの風の末を吹　李
丈ハ山伏法士みなよひ奉り　述
一念の鮮し歩く七まとひ　青
かくちハ児の穴跡いさしく　李
跡ふのり行ある所より上りつゝ　述
神のいのきをとらえし鷲かな　青
滝たしこ夜の墓やかつらん　李
流石それなるちんも引火の　述
骨うつき思ひ定まりし息のくし　青
之ふうよ事よ捨ての家　李

夕暮小風なる流れの水の月　述
本懐ましきの紅葉うるしく　青
花手晃持まきらんさを持ちめて　李
独りつのくし重ぬれ行く　述
二
了律行儀合手で帰りて　青
勘當ゆるす二月中旬　李
釈迦陀羅誌式讓りあるん　述
八方弥陀降古参解なる　青
強弦や十方世界のうれ奉る　李
んいのちハ朝夕の家　述
いかなしの桃源花の秋　青
くさぐぬすゞに枝る行く月　李

羽ふあくら語かしく宗らの音　池
東坡か小まの外の一ちり　青
芸思ひ居まりの文のよしはけり　李
瓶子の様木残魚のさゝみつきさく　池
去用志れ山をえ湖沢の青ゆくし　青
谷まで行くえく薫研のてくし　李
二
笑風若金柑洞に投扱ゝる　池
吹矢ゝとおく黒漆升有　青
秋の宿渓の鬼みをさやくねそ　李
きり川虫鈴むし書行すつく　池
老草をさて売しまつのれて　青
そ葉平子情人やなむ　李

本銭をは抄る貸へ手豆ゝ財　池
のんきにぬ升杜尺つきる　青
出やゝまし安宮粥のさゝる口をく　李
松江の湖は未店の嘩　池
めり桶に鰹のそこをもつみかけて　ゝ
平月白うゝむくの朝　李
花あるしん荒の出れは祢りまの　池
三
父大臣の素つかす吉　青
才花冬や十二ひとくめくまする家　李
笈の中より走山の月　池
山男麻の妻をしられ乳房のまれ　青
に儀の松鶴むましい中の秋　李

関取の掛ヶ声より字余り　波
火付の噂としり花のくもん　素
本三役綴をを張るてくまゝ　幸
貢の箸や紅おこし　波
かさく百て難波の梅は兄弟　素
要くら第七の素　幸
て経のとし陶の水あそめ寺　波
混鈍きり箱す梅の下水　素
玖もの千升の百花探子了りをれし　幸
三
無のやころはさ神より来るくり　素
買うてまた経ぬ深気を付のはて　波
いりの大寺せいらの沸一室　幸
約諾京の三五郎四郎吉五郎の　波
代嶽やふりやせ反彼りや　素
小栖めでむ役の枝みたまむすて　幸
減金のは影振了晩嵐王　波
手玉振木了作りたる神返　素
岩戸ひらけて鋒取の見世　幸
諸の文字一分も定まさ定りに　波
拵ゝかそう古花の月　素
秋や幸りし二代目の跡気ちまふ　幸
よろひ鍛帯釉し玉露　波
花の枝続銭言銭きり取て　素
月しめみ厳人冬甘草　幸

名
青簾手をひたしてそうつす盥納
枚子ハこけてハ足にひょろつく
良志はし下女としの銭ひけ
赤おされの旗もふひらす
酒桶ぞ引等の一句志め出されて
情 以ハ人も流 そうら
素之より変かれて寄もなし
思ひ手ぬ経て来ぬ秋数榎
思ふし爪の気おと心ハぬ寸
志のふてらみおくり点とう
恋弱し内裏王みけて袋
乳母さくゆしハ思ふ〇の揃

述 青 亭 述 青 亭 述 青 亭 述 青 亭

疱瘡の神思ひ本るくし筆の月
ましてや向丸張良の露
扇子笄の衣装をひらつかし
松をいく代の寿限た乃
小陰の旅を嵐手あめれハ
これら狂を洗しそ一千ふる
火雷たらを諸てひらく安
若盛おもて本所の末
江戸の子ハ近在以来の咄とうや
繪う白るもみとろう哉 東

述 青 亭 述 青 亭 述 青 亭 執筆

同年秋

於四友亭興行

波戸そ秋志賀の京良傀儡でも是八　似春
りのしの浦さしてへて月　四友
沖の石玉風に袖の露それて　桃青
足きしられてや昼の日しらむ　い
山おろし小柴のかけはさらと成　春
ましら乞ふらす手にてぬめくひ　い
猟師衆は庵を守らしつ竹に櫻さく　青
ウ
禁を翁みてらぬ御ゆく　い
めす人ては三笠の春や咲ふらん　春
火付の咎やとへらまじかう　青
芋難の風公儀よりの烈しくて　春

御宮気うれ白髪の外　青
手次巾頭かむさくふとや　春
洲崎の松みひとく在家　青
すてちし春の野のみ北風を思ふ　春
涎の気手携つらふしむ　青
又や未の風呂門おみ物もし山　春
南粉四百八十目　米　青
芳野山こされて武士の世かな　春
浪こす岩をまくての冬の　青
花の庭有の松風秋の佳そ　春
素桃よころび女房めかれつる　青
二
血の気筆らしみ幾年の春の庵　春

膳のはつゝ干さゝの手ゝ茶袋　東
ふめしを中川写にゝゝ季恋ハ　素
時雨の松比斜えをよふ　東
お祝儀手さらまへりし芸つる　素
宿きしの月ハいとしくしきけり　東
棧元やふんどし比ろく秋の風　素
芦の丸屋てうつきぬりけり　東
海よ多ふきれて鳴る浪の和と　素
さしれの隠手住ほ夕のしやく　東
甲斐ら松や次係の犇ゝふ入ハ　素
日上人以親てしけあり　東
尾張の犬もしらぬ罷ゝ小祝之て　素

三ノ
祢代の嵐まとらし驚く　東
明ぬれハ荻原との影け中　素
風ゝ芦のぬるゝ佐苔堂　東
お使手りとも秋の米和そむ　素
二百俵とすく又御の寄　東
為の月ちうてや緒をさうすん　素
既手よし萬み合戦破の日　東
さあらしる寺すの屋をえしさゝし　素
てりち小付る男ふさはしく　東
冷食を鬼一口手喰てゝり　素
邑生滅法生萬ぬ枚清　東
煩悩の首をさらして棚さらし　素

寒むすかよふ花ハ残将て　青
口情の花は巻くやめく大印　素
ふりまてゝ郷のそゆかし山吹　ヽ
三
ひよんな思案出つ了や峰雄　青
あてりくらしに通路の雨　素
お情すゆ河の君のの木さくらそ　青
相ありおつりみのくる治人　素
古数の里ちり雲よす橋んとハ　青
菜ちらのゆす風吹るかまく　素
幾月の中松るそうや陰まふん　青
とくと岩松の下女ハさへに　素
残情の酒さのわきとたてぬのと　青

以ありは情き投てくみよる　素
老衣紺の秋すそしおりて　青
ちゝ引のりく星のこのひ路　素
なとしくと天の戸涯その夢の月　青
三
三布を取へ都そうし秋　素
路のとし田ふ流る読田川　青
山そ時雨て寺ゝ桜木の青　素
深雪のはるよるをふ隠里　青
多きも帰とて塗て仙境に入　素
句を桃灯持や見めしらん　青
篤めそやふまてくて枝ゝ草履と　素
赤ゝそそり残武佐の礼お門かけて　青

衣を肩にかけし仕合　素
酒手にも白雲帯を解きたり　専
秋風起てむらよりて棒　素
筆遣ひを身のさまくハ鬼にし　専
尾を引すりて森の下草　素
御神籤別花ハ哉なる　専
つくしをその手まきて飛わり　素
名
捧げける二つの玉子かいさりて　専
うちやさ庵に蚤のかくろいと　素
雪に隠す伊勢の御榊もお腰し　専
ふみ石の中に八十六　素
山作り硯にむかひ笑とらさ　専

いとう亡母をいてや此庵に　素
物書を寺の西方ありて　専
菓子の酒れ古き語れたる　素
太閤の六諸一足や跡もなん　専
芸能おそしも蹴はりき手　素
秋の六郷見火入とささけるもの八　専
恪筆の袖にて身をおする　素
思ひ切れ売の妻戸をつぶ隠し　専
喧嘩眼にくとくくれ　素
十
薄情さるかしき名の　丶
黒そのそえるかくるつ出たりし　専
追剥の語を裳めけて来なり　素

蜻蜓孫楊や咲見つくしむ　青
千年の宵に咲いて秋きて　青
折かし松竹の九はく　〃
より金の花郭に青の公任　青
山ものよみの廣てあをとお　挑寧

同季秋

天性を八清れ八天狂八清テの秋　桃青
桂の帆たしら十分の月　四友
きのつむてふみをこえする雨降て　似春
山ハ猿すまよむもふり　〃
恵降見て家すなるも人や字　青

うけさハつりしの偏大将　〃
備えて御秋鳥饒前のえし　青
若ハうしけ干峰もうしく　〃
ウ涙にて花さしろあ露こくし以　青
神し給さんし松のり菊月　〃
金沢子お拂ふもも千代の秋　青
みのつれもるお座下の月　〃
木城荊山ハしろうて書棲　青
諸ら秋ハ木芽の麻衣　〃
為と葉に何をらうみて鳴鳥　青
雲尺ハよそて吹来の本のし　〃
杉路を手保の枝の大さくい　青

長老のしとね見かへて伽りけり　専
借着するおれの隣やひくし哉　素
霜もの古うを筆すゝめすゝり　専
花の本を祇山やよう学ぶべく　素
宗鑑のこゝろよきもふくれ　専
二白砂の旗手まねいて踊る雪　素
ふじを軒端やめぐらす清　専
寺の鐘定家為家の比も　素
貴きは都のまゆみ月　専
八百手御燈の光霜夜かな　素
狸のこいちやしめぬ本寺の秋　専
粮や香お手ぶさつ蘂　素

綾（カハ子）等く伝口に谷　専
一室寂光すゞし左右の松　素
雫をひく波の瀬に情　専
ともやすゞ切あてゝ飛ぬる　素
墨の似をそゝるふ竹の一村　専
紙を拭き陶し経筆まで　素
みの行に狗の火まで持かしく　専
二ふさらく奉長持かしくれ　素
いさまさ人をしつ物やすし　専
跡の数ま盃旅すも後ふて　素
硏（ケヤ）哉膳（カツ）に叹ちすこの川　専
おもしろくかるさハ釋迦の言の葉と　素

歎仁は説法中ハきく伴さし　素
藻小紋の羽織ハ黒子繕ひぬらし　青
汝よごしれ縮の夕映山ニ入　素
笛吹をと木曽の笋やすゝり声　青
驚蝶ハ防れとも毛穴を動く八　素
綿の骨いくとはらし里の月　青
又ありけるまし丸山の色　素
作替秋の東花ちりて　青
三
うすみの面より絹ゝむかしさ　、
芝まや釜掛仕くまつ内千　素
投行御幸さて娘しゝて　青
清借あそぶくさもの小屋京　素

行く岳館大松　青
世生物気をとらけんとむとらけれし　素
茶のつハま未なちれ降やらん　青
囲朱ハ美緑の無とまへらん　素
善男者罷し説をとまひし　青
又なて孔子字ハ太二郎　素
みてはとゐハ岸けす髪　青
不心中あてましいて御みきん　素
まゝ性扇糸たてゆきう　青
三のふ荻ハ取ありつる室の月　素
三
秋を通さぬ中一行算口　青
寂滅の貝ふかたる部嵐　素

石川めなる山本の雲　専
大地震つゞく龍やのぼるらむ　素
長十丈み餘るなり　専
加賀ほどの旗板高く見えまして　素
通り御簾あけて気色丁　専
ぬれ桜や小雨あれハ手鑑　素
折様ほれて対面初きん　専
六義ハ伊勢の山おや子兄　素
何内ハ来ぬとこ秋風　専
きられてそ鉞匙ほまゝ神の春　素
良き嘱なら檀ことの寸月　専
拝まのます姿恩花なし　素

素牛より西瓜八し　専
名 新をみ温泉あそのふすらすめ　素
代八幸沙幸めつくし　専
何にすら汲の与三郎大職も　素
たゝけ様おもし世界に　専
口香ちそ出役柿を貸らる　素
ゝすのこ抱より赤以るんとし　専
毛をおつくや来くのほまん　素
素子剃る程てのむ　専
広て精の幕對毒なるる　素
職お桟なる峯に回詔　専
針一ツ茶民られき当職す　素

けんどむ蕎麦や山の端はなる　東
小半の酒手習ふ月も月　素
広平流む狐草の露　東
十三 露風も六霊経かくれなく　素
かくらりは天下おさまりき　〃
浮ハ冬ハ枡すむ人形浪風も　東
海士の家うしハ能のてくに　〃
はちらし断若火とはらて秋まつの　素
八百豆腐月とるれ雲　〃
面影はれんし大根花くしさ　東
あふら隙子ちらすむ秋の月　素

同季秋　春澄
のぼれる数の大寺江戸の秋　似春
泊りのかゝる千金の月　桃青
萬やよの秋久しきに雨晴て　澄
漁舟は櫓ハ汀浪こす　素
礒の松にいろくのしは松の尾　青
与行はやちけき仙境へ入　澄
ウ きゆる菊も雲の上まで咲けれは　青
いつも御菊みし　素
御所うらて千お姿ハし　澄
ほしさの行き瀬々はとまるけ　青
むかしみきての歌はいかて　素

釋迦まてしはらく見は月のこしか秋　青
氷作りしつらひ修行堂衆の降の衣　湾
鼓の二つ重くて寺さきて　桂は　玄
小菊原も天も秋のしと　思ひ　青
鬼こしらへすなと生猫にして　湾
天も花に妻の髭担ぐかたげ乱　玄
二
飯のこてこは書きてありゆく　青
寺の霧も猫ハ邦て助し幸し　湾
廻つ以の一いそ草八ものえみん　玄
荻の中にしたさふか茸はされ八さ　青
金輪際より亀山の寄　湾
毘沙門は鉾の先にしもての秋　玄

お花は首の盛うつる月　青
蕎麦名八ツ子やさけめらん　湾
去年より文字えれのれし中　玄
菜物右近ら歌をと遊して　も　青
古川のくもらうそ尺かしや　湾
気まりバウは二けんの杖さし　玄
日待ち来さる山作しきれ　青
二うやまと秋も女因果すさむちやすき　湾
秋のいつ川こる中包み焼てみそ　玄
肉趣に幸は茄や子らん　青
松八すりすら入　茎おふ　湾
花八みれ袖八綿の長縮さて　青

肌そしハきむくらうひとへの祈り　素
同　似春
まて隠家に旅さきをする　春澄
みちを荒してハ他なる山　桃青
杉杖手かゝるふく月の新酒をとり　素
庄阿ハ肩を衣しつ手り　澄
条よさくきめ本王のめぐる秋の風　素
天に一昨日絡まとう手脈　素
洗ゑ枸を漢の面けて尺しらや　澄
やよ郭しら天帝のさくら
嵩くらし不変不抱しきまるぬ猛き　素

おらよのよくくハ古ちみを　素
色八招千とせの朗くくし　澄
危風そのあハ詫事の素　素
出女みの玉依姫ハられとぞ和　素
御代もきらす百文の恋　澄
霊宮の枕草子をとふしおみ　素
李かの帷北首さきまる　素
寂よ中に儒者一人の月澄て　澄
或ハ庵浮雲浮の秋　素
二 牀以おのみをまかれけり野の寺　素
とうしふ万手志あひ印荻　澄
乃ち窮の庵も髪と生むさく　素

小町ゝ果は女方ともも　素
恙祈語ふきんへみつりも梢たる　波
告ずなのもてにかゝ識(トキ)やには　青
あら絲錦そろしきやと思へて　素
秋の庵手　積てきひき　波
針立は玄賓僧都見まちれて　青
秋たえてめ擬ハ湯山比月　素
岡ゝ杉枝きのふハ峰か霧なる紫　青
四五文ほとゝ寄しくまゝん　波
二ノ
又月のけ光ハちよくにのしふむさ　素
塩の〻浅ふ沖津出し波　波
竹戸柄か波の中門や山めぐん　青

渦まきしとまつし嫁の泉　素
山ひとりこぶの松おろしものや　青
耳せくかくす岩の声枝　波

同　桃青

塩かしても以きよつてん吹す　春陀
出てのぼる波のあちら野　似春
川流の杭木や龍のつらふむ　青
手事手ある夢みとりし　波
又ともつあらふそも岩根の月　素
ウ
高う吹かすり山み秋風　素
あらすこの尺しゆすくやつす露それさ　青

納なよし まてあさきて
浦島や 桜花ゆけて梅むれん
嵐ゆきぬくる湖の夕浪
於小舟 米艘の沿さひ高ら
萩も 藤も あ草 生ら
をぬきられハ寄せて 女ハ貧報神
大海をしはれてくして 寄
一夜の月 八ツの刻ぢらをふりまて
ばらちてあかし 小男鹿の角
数並ためれてや 狩の車の其
左吹きを右とし て 東
二 麦領の芽や 豆を霞むれ

渋 春 東 渋 春 東 渋 春 東

妙なるのりとどくとくのつく
幽舟ハ残漁舟つなきのひむ
さの竹ふ千鳥ひよる浜千鳥の浪
枚ことの金龍山やたてつむ
聖天堂くはらうきさん
帳面の志ぐれを沖あけりきて
あつまて 手ハ石川 名文あへ
言のあひをすりきのたよれハ言の葉
既千不常も耳やあ優く
将の月様 所さしさ 落あふ
ほ家をおくあて 恋衣うつ
二 吉男のゆを あれまる秋更て

渋 春 東 渋 春 東 渋 春 東

鞍の床にさびころし鳴り　泥
唐にも残みのこし脈と見るん　素
きさしもの千木天のこく山　真
伏見姫のよめり時分も古くさく　素
古業に之る仲人の方　泥

同

宮や月百日千金の通ひ町　桃青
夜に数なしぬ看板の寄　二葉子
新藁麦や三島がくれに田かけ節　紀子
芦の葉らゆられ味る浪　卜尺
基雲くれ柄なし小舟こぎ出でく　二葉子

下男に七与市その外　桃青
ウ　飛手の老荘流にあきれけり　卜尺
荘草喩ふくもりしらく　紀子
寓諭の陰陀の紋を著て　桃青
あをざさの下緑青の山　二葉子
渓よりの峰まで月の前にはつる　紀子
秋を生布に床の山風　卜尺
枝々の瓢中あらしにまくれ　二葉子
精を洗ひけれ三位入道　桃青
かくと宿をかり僕子も分からねば　卜尺
又屋を立て蛙ならずなく　紀子
掌に有る金をとねらふん　桃青

二訪田のかくれ持ゑこしさ　二葉子
毛鑓を御門の閑まる錦あと　紀子
てうや霞常磐深葉する　卜尺
彼れ架御衆ひのかひ段やよちょ　二葉子
嵐千羽ゟ郭公とぶ　桃青
押入や淀のかうし北窓障子　卜尺
織もの花物衣裳の森　紀子
能大夫末ま時雨の松見えて　桃青
屋様うくゆくはうし紙　二葉子
何郎も寺松の花やとのは　紀子
姐板の月搦手の不二　卜尺
昔の秋三千餘人の拂物　二葉子

二釋迦もこのよを欠落の出　桃青
板坊千精金のうまもつりひ樽　卜尺
大坂へ川も尾のこ徒る　紀子
新町の火入とうや見とうや　桃青
鬼一口千仏籍を喰ひ割　二葉子
花の時ま方とい川し若衆し　紀子
惹れこそまの王代の春　卜尺

同七巳未冬

見わ草あ菓子つまん手の雪　桃青
筑紫味噌こし岸綺ふ堂　千春
濱風の碁盤を鋪ら済て　信徳

縁ふ従衣ねもくつけて　素
嵐とうら花も月の入るや　素
ウ蛛網けしさハ新停りし　徳
河へ住しや一いゐ女が枕の初尾も　素
百みぢしきくたをふれの秋　素
他し声をしかるさの釋迦の談もしハ　徳
彼うひハてけち十六深　素
又男ら姿かうちハかなしかれと　素
古川雨折手恋そしらて　徳
つくしと汜命のやを六指きと垂　素
強めてとやぬさんきうの家　素
須か月手れてやさうこうの月　徳

戀の手前る戸の細芒　素
料理人沙弥を立て草の浪　素
木をつ肩の扇汁の素風　徳
二住吉の汐干子尺しぬ小刀紙　素
八湖の姉松纏ものをとく　素
走てぐくに旅猿と袖も縫うつ　徳
枕みくし縫めけの米　素
論をつす天の濃をし中聴て　素
経の白布千強をうしろかれ　徳
滑川ひゅう艾千炎を住　素
勢の家よう羽帯の風　素
いそうきくら利久とい州し法師訳　徳

初比京の三郎しく秀の月　　青

虫の声つゝて百さら御出し　　春

いさこもしさ石摺の宿　　風

二とんよれよて武財をいそし奉　　青

国生の未祭すりする四竹　　風

別さやさし乞食の姉背をする婿　　青

うらひまも得てこそのきぬし　　春

思ひ川姑舩よ七夕の秋雲　　青

南無や稲荷の跳つきの墓　　風

同季春

暮想

さればこそ二内中旬御勝手　　桃青

天下の相のけ衆出まてし出　　杉風

両霜古気ひゞくあさけり　　似春

まろむ嵐于雲て氣御くく　　氣

雪すまり京に鳥けほのしと　　連哉

谷の戸口ちうきれ香ばし　　杉風

上ゝ吉野の雲吹におし　　而巳

千里の翔も金がねの秋　　執筆

同

いかつくや豆腐千貫く薄紅葉　　桃青

山をこゝろし櫃のこゝ秀　　杉風

手を桶その度猶月もそえて　風
こぬてのこゝろし風のみなく拝　青
何ッ對そえ餅ようふのむら雲の出　丶
雑そをたれて峰の松もろ　風
和らくのけ岩根の床みを紀風　丶
あゝ川添をみての手す末のしら浴　青
ミ
茶巾さらむ袖より傳ふ風さそて　風
何ゝ杯等女の行け初の　青
五十点あらやをもほしさん　風
ひしむらむらを絶ぬ鐡子学　青
随筋ぶ添んてよ初る流の家　風
青胸何しみ松も此史　青

小秋對南恩そその日ら限り　風
そのの何のうしきぬしの京　青
風句ゟ小役畜子浪こして　風
原吹粋る給みタつゆ　青
浪金み秋や被そ鹿しん　風
ろく志やし書む山のくみ月　青
名のの峯色的ひ寄る葩の浪　風
二
震もそうに久ふつかきつ　丶
ろき枝み袴子書北志ろ深味　青
嵐の紀そえ方ゟくらう　風
米俵ふ々えそやすそてつるむ　青
四季のゆふ出静れ舟さ　風

逆り縒をまくしても皺ゝみそ　青
黄緒のつもりよみ手ぬけしの　風
歎父ゝ腹きし浅瀬ハ此川こゑそ　青
きぬきハ夜ふけ彼岸から出　風
秋風や赤がみ髪剃る嫁が乗　青
学らん流されし東の下家　風
此方ゝ筆蹟の江もものきゝ　青
酒ハこゝろ浮て嗽つりあらて　風
兔耕ハ勇めるも以下まで上下り　青
四里の渡りしる舞の岩角　丶
二 犬殿をハ取しハそのれてやうの峰　風
松の子をうす下帯も形し　青

まさ柳の浪花波の子安貝　風
灘は塩谷の橋の庵　青
破小舟削りしけふ花見よし　風
本家千寿の砂地の霧　青
香の気やこに萩をて庭の月　風
かゝしさ雲の木曽山の秋　青
味噌すゝしき旅の谷傳ひ　風
三 十四川の川よしや降り出　青
つらし秋の大寒の門や吹く竹　風
みすゝ和尚のとらへしの寝所　、
花くもり五ヶ所より出されて　青
寺の里橋初しらの雲　風

三
蒿雀や絵書か鵜千流るらむ
翔筆と経ハ風まかせなし
真白な雫しらけて竹の波
夕日に隠れて柚傾く淀かる
小法利の香をいとむ山や柳ふ
いろこくぬ柿を凍しもしも火
下ろしさて明月の足半牛の背
鮭水の桶はかりかもとしさハ
上方のかゝり紀念ぬ使して
ちるにもしゆらかゝなさし桜
踊かや二階へかゝるのあかれ
若もえいちやすまかきなん

東
風
東
風
東
風
東
風

宍様のよみの小袖をひかさり
三
一汗ふくのます若川の月
手拭の雫も浪やよしよしふん
ら松霧降しらくさの淀
ともろけ生死の海をたらくらう
まさ小虫しみハ草西月もえ
開闢の天地成て大称
岩戸かくしまえ初蛙
つくのもん鬼の角のけの袖
折ひの稽を教しハ余
薬刀のそゝすらしみハ黄ははに
惜霧まやお植のつゆ

東
ゝ
風
東
風
東
風
東
風
東

宵宮流行とめし神の月　風
踊子は常ゝ千葉村灰　青
花ふる紫明し書して抱て　風
篝り火一荷打捨し夜の　丶
名　古郷へは裁付着てや帰りけん　青
筆の行を思ふ獅子舞　風
第の泊りし風吹かれけり　青
義経見まく雪のほころびき　風
玉子海ら好まし沢戸を打つらし　青
冷も昔しぬ大沼のあと　風
瓶[illegible]住吉のまつ[illegible]　青
名[illegible]芦田[illegible]　風

揚屋[illegible]　青
乙女の[illegible]白[illegible]子の筆[illegible]　風
呉服物[illegible]源氏の[illegible]　青
石山寺[illegible]しき　風
[illegible]法[illegible]　青
見彼岸の[illegible]　風
裏　六日[illegible]橋[illegible]　青
よしあし　法橋　万　風
[illegible]や　法橋　[illegible]や　丶
さてし　紫[illegible]杯の[illegible]れ　青
[illegible]　丶
一[illegible]きくし　風

おもくさ薪すもハ花ハし　青
さやらのくゝり山里の春　風

次韻　天和元辛酉

表懸

背伯倫ガ傳ニ酒徳頌ヲ楽天継ニ以ス

酒功賛ヲ青追テ續信徳ガ七百

五十韻ヲ

二百五十句

はやりけるを友て八声の花ふれと

三　又このきぬもの春もゆふくく

饗の河し鵜子膳出く鵜えへて　桃青

直ニ句以テ荘子ヲ可シ見ツ矣　其角

猿骨の力はそし手朱あそに　才麿

志ろくらく風み松の秋のしき　楊水

いわ手まくいたきを須ろほくきれ　角

梅心そのやかし鶴しきん月　言

灘竜はく魔のうの山の木可より　水

粟よ稗さく泰もしの宗り　麿

像十かぬ画屑を宗了嘆きらん　青

慈出る袖ゝ楽つ枕しかりまる　角

本のうしれ乞食了將の心をそか千　麿

先祖を尺ーる家の秋うしり　水

粋きそしく幽冥をと去こへとらも　角

ちるやうへにかゝつて引つけ　青

三ク
武士は奴まくらをはつれける　水

女ハふくれてやおとしいはむ　麿

さ月ばかり鏡のくもりさへ恨し　青

ころは猫の身をも背ける　角

名月に霜も思ひ出し別れ見し忘　麿

乳よりしの数の涕の萬の縁　水

まち秋を花し食よれいかなる　角

白魚をかきよする餅春の宴　青

寛平は妙法ん御仏会をはり　水

博士提灯を枕にて紙の　麿

くしたてかへる女房のあやしさ　青

血柳は霜を初や忍ふらん　角

てふれまいしむくろへ起さなよしと　麿

因樹の山をとものくらハしむ　水

名
天帝は月姿をすゞおしかは　角

桂を堀つて星縁をうゆ　青

市の旗手風のかすますのほこのふ　水

秋に釣して利帯妻の記　麿

白き釈仁紅葉村に送れし堺　青

湯の火龍鮒とし料る　角

師魚ハ諫の鰻ハ胸を割せける　麿

女房の岬に法人名をも活　水

向得てしはれ流ちれ嘲陣を　角

柏杞に初音は魂鳥の魄　青
恋人は彼に似しかりそめ　水
面をとゝのふる家風の妻　麿
夕暮は息子惜みを吐きもし　青
民屋はゆりて膝をせくむる　角
咲ひの木芽の草は地は睦く　麿
まさなくわくるぬめ渡の古巻　水
月見きゝひ方旅ゆる向嬉しくて　角
あくがれし大をやどる稲ものゝ　青
従冥し小袖よねとむのいとぬ　水
鈴たよくしてとしめやしろく　麿
花に照古（カハラ）神（ハコ）宮は奇特なく　青

幣に菜作る紙の多　角

同

両手にふ五文字をしたふ　其角
東海千とく緋扇なとしるす
下とし此秋気と雪覚さく　才麿
月をとまるひろ烏帽子をかぶらし　楊水
海に陶をもらひけしや　桃青
松ほこさすり川をひ草は葉を志こゝ　麿
以やし山河は路としさる　角
夕ぐ雨の雨を吹きからし風来て　青
荻盗松風の音をも囲ふ　水

ウ
和の間手すけて敬をはきる　角
宙基ゟ紫ル泥枝打戸　麿
とひやし仁上手よう去を移して　水
大きんうて毛ならしと地しく　素
宿さ戸説て和多の摘子招涼湯むり　麿
ほしし八川さ帳の就宝　角
女の新陶うとさしさ汲漫く　素
若宗年をしくやつを閑了　水
ストントン茶入葛しく八ツをいとも　角
取ほくすて枝要つゐすうて月　麿
秋の末らう鳴涼風とそう侍りて　水
蒔の院比沙陵をしとふ　素

兎角を人ハ花すはらめり　麿
子国の高そし寔手ほりけて　角
二
渾沌(スヘウホウ)眼手京て年ゟ遊子　素
鈎呼しし秋ゟ麻しの山　水
応るみ女ゐよ鉄のうちほうり　角
よし原果をしめりけみいきゐふ　麿
棒軍鄧(ウイ)中川詩きとえすつて　水
語むのはけより梅手弦ひく　素
宗の大家もし風明王のむうす手　麿
摩訶半つ若奈国手生する　角
物ことにお抄を捨て眺處離遊ほ眺ハ詩呼　素
ほうしと前てくるとやつて吹　水

秋の食ともしく翁覚るは八　角
垣別の香さく耳を後立　唐
月の秋うらみえこへ此旦夕さ　水
霧手去のうむ妹ゝ浅姿　青
二 ものいきく読て里の躬て人よ　唐
継と添まり此奥宿さい治　角
小納のす木枕に帯さしまつ紀て
納戸の衿をも有し条る　水
媒掃之襪二用於鯨之脯　角
唐山の翁盧原こうらて入　唐
風いくまく称うあうらに　水
蕉延てうみ枯康をたく　青

操しらし白骨の陰漿付て医する　唐
なえて利刹緒をよむを粉蒸し　角
緑小僧豆鼓手有の鉢を剥む　青
霧ゑ明る芭蕉手しき風　水
花のこ釣舞手羊を直きうし　角
棲手ま鞋をつりまてる葉　唐
三 不帯うひ直すハ吉季の家をし掃　水
箕をし足て事く旌とらしふん　青
木のうし此かくしの枝子芋未千七八　唐
山花路をと抱へうきかく　角
見ひおす人ハ地流てし納さし　青
木様のおれしつて木爪の唇　水

髑髏鬼灯の燈籠しける　角
踊狂衣に旅寝の浪　麿
海の月佛伽坊主の夕茶さ　水
青葉あらしやる夷の泉水　青
河骨に鷺ぞ隠れ来るとやつれ　麿
ほむら手ゐしこ下吹と化　角
葉拵ふる根の庭となりしめ　青
天火之闇の金ほりの笑　水
三 妖江の浅き岸には去る浪　角
青海若しらい蛤殻を浮　麿
花の道堅きて旅宿を賞　水
有明秋の東金の倚　青

まひしき浅夢妻の夢千す豆猿　麿
夕ぐれ淋しく貧民ひしけり　角
椛の木千蝶侍しるは扉之　青
秋の清水の書薦哉く也　水
笑の翁をほと松魚ときれ魚を　角
香し写も倚をひそきし出で　麿
紫つくと跳拵のれては念学屋　水
泥坊清き雨の火まし　青
字の花くに蓑あら原さきのしか　麿
狭の里に足ほしい瑞　角
名 配ル人若の小昆布と牛のさ　青
何うかへ此菌幸蝶を枕と　水

花やかに鯛も計きまゝ生小舟　角
また絶ぬ尾の行を出し山吹　麿
麦畑は豊の兆しを覚しけり　水
勅使草原の多所参る　青
秋をや穂の色を追へさし　麿
なやきのふれほしくきはさま　角
法の水は生田の森の秋月夜　水
そまりしけり乞食壊す　其和
雲いくよ沈く里は衛所けり　角
寺しの納豆の都にかし流　麿
よもこの我も植花に夜の光を信　水
墨炭花ふて小野もほし　青

膳をそ後に独の清の気とそへ　角
蔵みすく滝も生遊しつ滝　麿
竹の戸を人より女が霜にまれて　水
赤て孫すしみこしくよ　青
流のみすあんしと哭きれハ　麿
手とみをそくさるの方み理木　角
系係ひて寸龍の花千の浮すと　青
如泉法師か書力ゆり　水

同　才麿
青まあるき泉さハ秋の酔月は
緑をくさ有す株萩をと買　楊水

はゝ枕とも茄子ハ菊ヲ末枯て　桃青
鮐さしはすまう生海鼠漸く　其角
雲の客みそれの客とゆすまくハ　水
蘿径の亭ニ題を役る　麿
糸やつこかゝれて風除林と呼　角
招キ羽おりを着せてほふきし　青
ウ
嬉しきや女房のせはしく泣付を　麿
急はふかれしる才手付ず　水
あ文て樵の戸板をこち放す　青
枯ゆく扇手あそうむ　角
髪結の行きも恋ハ蓬しくて　水
卒都婆の男ゆのゝし洞きる　麿
骨カかそしけ粥のまろきし　角
瘦さる一寸の気ず旅うつ　青
肉ナ有てもうろうハきのふ霧城　麿
米とく青は耳ず愛けき　水
さるもかびて笑子おさく秋しかそ　青
業鉢居士しきて翁ふての木月　角
筆耕す書院の生ず花つけて　水
二
葛菓あれ化為の札没うむ　麿
后宮の数入ずやそう随る　角
新しや上は佛でれ前のささや　青
陳中さつむ捉了称の雲諸の恩ふる　麿
挽灯きつきさ宗の方けるひ　水

風呂の角内にみとを悔りける　青
入ルの山ふみ根をのぼり　角
雷の斧丁〻としてきこえけり　水
云く又云し龍陀の玉　麿
俗のいふ麻鳥の海は底なしや　角
鄭の字は東南東堺　青
何を覚て詠の霜尽る　水
ひとつのしと雨籠をもほゆ　麿
有と蒔く芋の葉れ行轍端　角
栗一つ蒸て菓子干すなる　水
二ノ霧雨の明のいの敷ひとしと　青
見ぬ起て帰る君がめ殊　麿

釜のふたふる人は志のひそかなり　角
槌をもて〳〵だく釘の木　青
古家の治郎詰きへ手紙は　麿
いくちの集う風の行をかけ佐　水
麻の葉すぎる小餅をあまくして　青
うらう枝さすなる生の浦柚子　角
きられくて清水味とすむ有子　水
ゆるく霜荒をとつけ渡す霧　麿
昼餉の食くく浮にタいさゝら　角
人死を待て出るをんなし　青
石が臼花のめてらく咲きりく　麿
木ちりみまて風をまつ枝　水

三此雨甚ノ紀ハ處ニ害シキツシ　青
頭アノ進ザル躰キラクシ　角
大根の葉麹の閑のこゝろさまよう　水
宮のかゝる餓丁文付こゝやる　麿
おもろくや火桶の姫の縁ぞよ　角
ろうらひし床ニ蒲団引つる　青
又やしと寝入るゝとくにしるさ　麿
通ま首の浮きたてすむ　水
やまひしれ根ゝ岩みめりけ塚　青
枝をおし今ほりし第て　角
こまい有る村風とわり三味線を　水
優しやすき添ふほすこい　麿

秋の露後ゆ草をまてる径ハ　角
三住むゆるしてゆる紫み戸　青
埜しろく翠ゆを相ひして　麿
俳色ちゝしる修若の書云　水
意崎の松ゝ娘の花の基　青
甍ゆまず勝る雲の内神　角
トつし濃み箱哉志ゝしく　水
坤の筆立て草の松ひ　麿
無縁も皇居す住の殊性頭ル　角
清系の内表をと模彩　青
川さ系法味寺の賛とてくに　麿
志尼斬み叙ゆう　水

衣絵る梓子揺めきつのりしさく　青
お里子廉み孤引て入　角
松茸干さしまのくハ枯ゆくら　水
梁の栖千里のの　いづ　麿
名
俤霞みて茎の音もし思ふなり　角
足袋さすまで宗十風名をまねび　青
扇折女ハ夜すまで揺りよさく　麿
夫ハ江戸すまでさまれ咲　水
むかし一むかすのことを偲てやみて　青
舩子るうまの味家とも出て　角
稲こに本くて上るう涼こ香り通く　水
法眼ら書し武者絵しやうん　麿

空遠る君の近の花のりしき　角
熨斗をも符の燗千折りすけ　青
ひらしおる緊簾のうゐめハ枯跡り　麿
有國とくハ茶腰し　水
風の月熱の海雲を結めける　青
責する小絹社阿やしさよ香　角
十ト
山猿てくいくちの宝を置忘れ　水
岸の枝折をも積すてしまう　麿
光春の柄をも深く定めてむ　青
年をとうえく経し人の助けける　角
血をも拭き風右刀を折とる小蔵（ヒト）く　水
古歌をも取て啼くきま千枕す　麿

行かふ春に花見ての茂さむしろ　角

猿ハ酔て酴醾に入ル　去

同　餘興

附贅ひとつ流に至けり四ヶ寺　楊水

花用の枝をさし出す茶　桃青

秋ル鳥はみな俵にも何ひとつ　其角

春し裡の四虫あるを隠るゝし　才丸

天和二壬戌春

弥生にもなれば旨つらし　麋塒

花咲からくも青山吉花　千春

風は来て三絃の花をやつしけり　卜尺

雨双六に雷をわするゝし　暁雲

宵よりの盞の陳を退ケける　其角

せんしやうろの霰子肩をぬ　芭蕉

素乃ろく宮や淵やの諍ひを畫す　東墨

ウ　梓桐の夕霽子を枕以て　似春

孤村たえてこゝ出る風文を恨むかと　非雲

燿酒旗に鳴くをすゝむる　言水

おもしろき事は八山崎小隊寺　執筆

鞘おられ掃を四向して出　塒

緬桶にもちあれば学化物されぬ　千

小海老爪白毎をよくさゝむ　尺

悴たる鴻の聲をしぼりやうすり　曉
杵枕の精ハいとくたてり　壺
作御坊卒都婆を寫の筆秋　並
八声の月に笑ましく揮く　角
味噌搗によし家隣屋根の戸ハ　文
悟てかのごく萩の小女　昨
鳥とまる花訓鵜の尺入し溢　似
杉枝に比をきるところ表　子
二 所思の形をさしき飛ふしと　樹
禿高に来て佛界に飛　曉
峯の代ハ薄の所と戦ひし　角
稀ふ物寫く五老に一樓　並

雨後洗く路傍の吉原に謁しし　壺
故の寺館血をもてもらん　文
桜ナ辯議の編よ旅立て　尺
櫻のこの白ましに隣くハ下や　似
白菊の香に酒と買とらふ　並
隠し舟多をひきめく　此
嵐文彼戸矢つえよる青濃く　子
隠の枝に鮮菊ひける　樹
東の五悪夜中に幕て夕の月散　曉
猫にたしき萩のさハし　壺
二 海さの浜に扇まくて巖嫦　文
蕪なの使すをとめにえる　並

此雲の難波の水は濁るや　似
紀の舟伊勢は舟尾張船　樹
波八句泊まるゝみちも又納うし　圭
契情こ際見たる人に　暁
ふと宵寺恋慕は常を書すらん　角
枯れ枝こ小雪なしてまつくろ　嘯
庵錦荷搬りかられて灰ふる　尺
いとしぬ役生れ気夏加は聲　斗
出きさてむ院こり形を傳られ　道
かすみのかみは樓開ゑをうん月　圭
嵐は鶴を花こおしきさ　定
當流のみ幕し様の為　角

古手之の月の三十日の有りくらし　暁
雪ものこりし笋をと杖つく　大
山おとは春こ羽あけるや鳥めらん　斗
郭の箔衣ひうし　似
篝こ入ま藏の流雪の洞　嘯
名を新ましつ不二の様上　道
松茸の祖父菩とていふなれ　樹
味ほれ靈の密柑献スル　嵐菜
城下こ火ゆるの艪生きのへ了　嘯水
旅小刀は吼ぬけてけり　暁
古轍高や世行の松こ名を打て　角
加つすは玄堤こしくらし　圭

椽上れ香たハ降そうくみちる　蕪
西瓜ハしらぬ満つむ　子
哥くくらちられ角星の哉　曉
月ハ蕉が代の古杉にやらは　樹
道善のよふそう蠹子を秋も尺さ　嵐
つきゝ寺耳ふ跡るよし原　峡
歩き翁し一すゝすうん枝葉　角
百姓の家に入て狼切　蕪
見此季先祖の椙の火の消ぬ　帆
野とふらぬ米に生る菌　子
雨もとゆのく夜ひの村に聞ゆる　董
蕪尾お猶る葉に花帯る　曉

元禁草もえもう翠わ乎　樹
をふゝき草や花の端つるき　角
陽池濟庵後の波寄志はし　峡
葉りふゝふの余引の巣　帆
張雀嗚きしうやうくきく　樹
憂し情人　秋の蟬　蕪
月ハ向う山寺よのを離く哉　角
石風その絃ハ名ぼりくる　董
常木の殘きハ澱に弁きしく縦し　子
ときとしのげ金色の玉　峡
袖に入蠨蛸宿くをおもきん　嵐
涙の玉はりゆう誉にかくのす　樹

我ヵり跣にて鞆の中途しと　昨
関迫東境門ヵ猟りし　角
肩に結て短冊よりれを踩く　暁
奥まくの佛逝隣ハ埒　嵐
篝火を刀にしけて恋のふ山　蘭
浪ハ弁鏡しかくしよう岩人　千
すて物法に盥をそなたく苦りけに　峡
暮つく但れごほしし軒　翃
市牧の本ひしをみなへし本陰には　暁
夕傘さすみてと姫と男と　蘭
玄冥して紗手をとまりけなひかり　昨
秋ともに思す袋挑灯　堂

花のなくて老人称す須てしさ　益
八重しく霧花びの小て粉　角
了和手中
此花は是て伊賀への山越米の色　松風
多八ころもとてかますむ武蔵野　芭蕉
店賃の高な料掃て素の本にて　〻
よりやかりやく業く手み々　風
岩肩脇さんて名残の月をし　〻
ウ
待そ来み鏡八八つ七つ
霜ふりしき例の痛手労咲て
きのふみれ迦そ結包とくさき

浮雲のきえて後ふく　松帳
釈仁以来の山きよし　の外
古以の松八ちひろ　境　枝
朱きをえたる世南路由く
探幽か筐はやうす跡る月
京そし　假る御厂の声
俳人嫁まして手法ハ秋の風
すらひを事干　手枕の露
一生まて起る筆のあかむ系思ひ
二
者をうむものすゐにうつしゝ至
張めむす　杉の戻乙戻しさ
ふのうを翁し幸きみしふれ

お妙ナ之みをつゝむ糸のきれ
流をむすぶ論笠のひも
首しる心の中そ表なる
さむさの浮寺岸のしら雲
又ひとつつゝいて進む法の武者
はさことを識之尾するむち
右よ浮けて杖涙むか旅衣
三
里をくりみ比結り　約　秀方
追剥すきてもわからぬ秋の露
三
しけて流れさ右力風の米
吉宗の松すうつ統る雪晴て
雨や思案を涂てゆくらん

消桁の手摺の幕の夕くのけ
火縄の汁一の二寸ほと
俵もの誘め枠する花の荷
江戸千ま上野風すの春

同

ふすまの筆に香を添ふる時の如
美しぬれし瀧潤む瀧
藤の葉千酒濯竹に宿繊て
活ある魂魄しまりの黄香
面洗ふ瀧の瑣なくしてまた
さらしハ二十八針きん

芭蕉
麋塒
一晶

ウ
きさらきや武者物語かよと
後家帰笑雨の翠簾の風かくれ
かくてくも旅のはかし矢背の里
更るくらしの手洞たへくおと
新ヶ雪にかと賞ゆる人あらん
一幅の潮千江の焼砥舟
ふ蕉を惜しと為船すゝり
蒼風積ムル倫乃雲
クツロ子ら精もてなし肩巡
昧萩朱也もうお寺葉
花付ても櫓ハ数千土へても以て
並尾ハ風に疑ひをとへまし

二
陽炎の呉服屋傾く日の大工
嫁に蝶覚百手の栗
ちる花のうらに老の袖を引
桜のり坂は清水滑りぬ
血に染む甲を都につけ置て
錦をおそふる大手の侍
長吏なる乞食ハ家の紫竹
手折をふよる牛葉の叢
肩ふる頸ハ久しれ媚をする
古佛の腹に往来をし月
荒をしられ蒸山伏の袖ぬれて
倅白雲の後ころも

二
ちきりある牡丹ハ眉の加へ大子
白緑袖躑躅や兎鴉
赤涎忽る乞鐘たらす両隣
夕霧長老且ありけれん
九ッ山鼎に森衣ハ節を煤
序をさ虫飛に春の文橋

同
故竹垣積に木瓜も世紫衣
笠めつしてや手の字都り両
敬謹さらせ藪に橋を拂しれ
市にいへるを藷ふ躬月

檗樹
一晶
芭蕉
樹

良峯の庵ハ小袖をわすれて
紅白の菊ふ手甚をと掾
都なる聊婿母のもとへくく
主人ハ様をもりて妹鳴る
稲ら此夜なハ沐蘿まとかゝりて
上章の印といへる三線
ふたまの裸をと鈴前に影ゟり
窓丈恥よいのちつれなふ
都のはつのこゝろまゝ御こり起きて
らしとも髪まきて葛のいつ川わたり
母の歎きハなくく肉をゆ月けをり
ともなさてくらぬ身をさへ都るれ

崩 晶 並 册 晶 並 册 晶 並 册

通和来の路芳花と秋くてに
桜光清き猶帰りたるれ
春風の池に猿をかゝりかよう
かゝりすハ縁を告るかくら
院の御すゝ餅米苅ん君と逢て
青嵐律社さての月識する
風の紹あつの夢をや拭ひさらん
内野をたちまち花行の哉
新しき塚ゆきしよそ咲すこし
魔をと後社臣にいさ父さ
千金をいやしく叢去を實とす
飛姫も抄れハ酒くらしや

崩 並 册 晶 並 册 晶 並 册 晶 並 册

十分の三十年を老の九十九髪　晶
筆のさしらて念仏たをく　蕉
二 蓮生は火を清瓶来かゝり　樹
猶故ろを畫てゝ行脚　晶
鳥ちれ蛛おそ瓶を買をつ　蕉
杦は巣をともる婦妬の千代　樹
絣紙の食する花の浮狂人　晶
る踏て鼓おくる春風　蕉

天和三癸亥年　芭蕉
花にうき世我酒白く食黒し
秋かくを畫する陽炎の痩　一晶

郭公て青鷺まぎて味くらん　嵐雪
さゝ身をも折れ夜梅　其角
月を隠す汀の無ゝを芦すゝて　嵐蘭
浪のさゝ花てもふし新　執筆
ウ 賢亀淡ふ雨よし新れ田甫よし　晶
朝て売ほしを与る米残衣　蕉
浪人の無するを情り思ひ　雪
やふの一枝て入れうひそ子哉　景
義桜用し宗者を撃ひくく　角
存ハ退之か解観を奪ウ　晶
霜冬の神ちち菊を啄むらん　蕉
汐照海て松魚風味　雪

世情の験を捨し弥代より　晶
内職に角をつくる風除旗　角
ゆかし峠の桜をもて学の月　葉
被蓮堤にて詩の上を次　雲
二 新解に西瓜を路さえるらし　蓮
つくしきりめぐりの松御尺横　晶
先つる尺る拾懸しの豊在　雲
君ハ私ぶきこのつき残のむ　葉
根入ぬ顔ハ六十の荊きけす　角
浮所に放まつく表きと爽し　蓮
人の懐質種長の宵の鬨子笑て　晶
松たくらひふと雪の此け古み　雲

きさらしや体中に似をしひふらく　角
山一野に飢て餅をも食る　葉
盗舛の有ゆ伯夷を足洗ふ　蓮
木鉄ハ武士の情け砂　角
二 天くらしき難去を焼や柴杉　葉
気ひさんや土胸ゆらかし山　晶
晩の霜さへと母に覚されて　雲
孫に豈ぬん赤すいくらう　蓮
花ゆ栖隆山の列をとへゆ　角
椋にすねて瀑布を酒飲　葉

同

酒債尋常往處在
人生七十古来稀　其角
詩あきんど年を貪る酒債哉
冬-湖日暮て駕ス馬ニ鯉　芭蕉
干鈍き夷に関をゆるすらむ　丶
三線人の鬼を泣しむ　角
月は袖こほろき眠る膝の上　丶
鴫の羽𢌞くく萩涼むし　蕉
ゥ恥しらぬ僧を笑ふか一の艸芭　丶
村雨に山さへ紀加くのさきを菜　角
海竹のとくつを藍て浅なしさ　蕉
特螺のをしみ着度を悲　角

一の姫里の花垣に薹を経　蕉
軒冬かしかし字題を責らる　角
作とうきしく怨の霊し吽にるう　蕉
渟安ぎしむ乞食の夜　角
出て花貧言にし富いさん依　蕉
芭蕉ほすしの螺にくる尺よ　角
麻るる佃浩犬を啖ひけや　蕉
飢とし出窗ぬ萩ねぬ月　角
翦入のを付すて不弥碟　丶
たくつらに止りて篇らしみ子し　蕉
嘲リニ黄金ハ鑄ニル小紫　角
黒飴くろしいおとらぬり氣　蕉

枯蘆髪宗螺の角をきれん　角
魔神を使トス荒海のまゝ　蕉
鐵の弓取たけき世に出よ　角
虎懐ニ妊む夜のつき　蕉
心く四絃の琴を吹あらし　角
呼大清て猪のともし火　蕉
下司后朝を妬く月を牙　角
西瓜を綾ニつゝむ御ぬく　、
二
玉川の上宝珠胎のぼう吹消たん　蕉
みちのくの東しらぬ石仏　角
武士の蹶の丸寝枕ニす　蕉
八声の駒好きと出て　角

侍あきんと花を貪ハ酒債外　蕉
春ー湖日暮テ駕シ馬ニ吟　角

同

一年三百六十日
暮口吹笛ニ之ヲ
詫やく年ひし白竹裏きし　李下
世また浪ニ大根ニく舟　其角
月をさと芋の膾や枯つらん　、
ちおうきまゝ毒をよみ味の都　仝
百をとる船と秋をあくさえし　、
傾婦を葉の蝶ニくる　角

ウ
敵ゆるす浪の色をいそけり　一

然ハ又に一宿の蔵　角

文育れ金様ハ屋をもつて鳴ル　一

みそとり勝さつち善ふ　角

廿浜を走のハ汲とりふかび臥き　一

士峰の雪を守む加賀原　角

松下て是ニ千歳の読さう　一

名ニそらかさし黒木串柳　角

醍醐の花尺る男内ゆゑし　一

妻を有里とそりかひのふむ　角

月ニ浄り生憎のうれ上戸や　一

花もきろく身すさ蘚遥　角

二
影の作て花あし継を植よん　角

院の御家の御ふうふ扇　一

おそも番茶小粒を与入むる　角

仕組とくしまず八宗のくらひ文　一

墨染女房中くを制ぬ御　角

霜にみしれかもし地とふる　一

蛸による額骨何を好情　角

風そよ夕ゆ切窮棒の紀　一

破そらしふ冷茶ハ秋のむくのまそ　角

こぬ萩の格子野を悚む　一

冬有の茶ハ流ろすくまうて　角

金樽桂子粕のみを拾まふ　一

二ッ紫生象を無物ぬ奴にたくまん　一口
すり鞘に入る掌書れ　和泉　角
寸法河切の忘れみしの紀ふ　芭蕉
昔から力む辛抱婆大小　下
伴の角門をえとよ花のやう　角
凡丈三百人の素の紀　、

寛文十戌年　助勝
見とに縁もさてこれ之肌をはくと忘　正数
夜走り河像ゆるり風民
加け作り河原杣ましに天須しい　宗房

同　長忠
抜ハ家の玉為右刀よ一紫切
ちる河矢の形ゑつるよ秋風　定純
冷しき石ハさゆるゝ虎ふ似て　宗房

同七未年　一句附
肩よ気物うちまのゝハら紀に和
くきとなしけとはれむ身の家　宗房
怪生祢のひとみまかゝ沃のさ
志やゝの論語もとまちのつき刀　許

踏ゝ霜さきゝ寒さつゝしれ
柳さきみへそうる海をかゝん　　訪

延宝六戊午

大阪屋の娘うちもちに不二の嶽　　桃青
坊ゝさしれ舟田子の浦ゝ子
虫の声白髪とすゝハあらかられ
瓜の中ごの寂寞ゝ哉　ヽ
孔子ハ鯉魚ゝさしみ好てしれ
狂歌する養老の頃ゝ有更て　ヽ

紙鞋笠尾うらゝ時ゝし
萩すゝきさ伊刈萱かし　ヽ
狩ゝ兎を兜の餌食の生肴
菊葉や酒樽醤油未返　ヽ
髭椀ゝ大道路の若を交る
仁義せ苔鷹ゝ植をおそる　ヽ
捨椀のおゝしるゝむ出見して
大宮の御たち和歌と妙絶　ヽ

雉のこゑ集るや入ぬらん
大津馬良駄よ高らの御射　、
我名をとりつくろひてよれしと
読手らしろをたをる尾つき　、
桶ひと川柳の袁をとよめる
こゝれ人写るぬのみての出　、
下の雪うる雲に秋なりく
唐網ゟハ渡ゝの海浪　、

すゝきを見れハ紫ゟそ紫水
中之くらゑ中宿にとさくんとそ　、
しるる春既千家よ中射ハ
御本をとききする鐘金の山　、
かハし吉葉泥舟の末
此界をひつくうゑゐ大猟孫　、
まち横手こしよゝの海浪
紗綾かへす宗し鳥田の子ら玉色　、

上八脇さし中八竹笛詩
交もしに銚子やとしの鐘覚えて 、

四十からふ去林のかさ
送り箸を忍しく通ふのハ 、

貞の錦手書海に沈めし花
女院詠うれ二位の尼館 、

大臣の退居らず紫する
味噌燒の古つきし稲葉山 、

宮以之川かつくへの宮 川の書
みの笠小槌かり玉の宮 、

手響手ゑ日の歌と流すし
菖蒲のうつり剃刀をとぐ 、

蹴まりよく何でもひすね奉
見も又うぞそく傳籤夷ね入娃 、

扇覚えらひしき 浮庵の舞
苦桃まと木枕ひまへかどつて 、

年もれハ松浦さや五郎兵衛

花や舟すのりみ行く京橋　ヽ　青府

天和年中

俳諧集物

栗か之山当余尉か秋ても旅　一晶

自紀飾てうり炭一つ〱の松　桃青

佛幸庵〱何處ハ坂をゆるもらん

天和四甲子

芭蕉ハ秀句に学ぶ難之人によし　李下

月と我を海の乞食　芭蕉

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮　芭蕉

秋ふけゆく身ハ老の里　素堂